
学園黙示録～とある傭兵の物語

89R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録〜とある傭兵の物語

【Nコード】

N1408V

【作者名】

89R

【あらすじ】

両親を小さな時になくした少年が傭兵に出会いさまざまな紛争地域を転々として学生生活を送るために日本に戻ってくる。それからさまざまな友達知り合いが出来る。だが、それから数年ある日平和な日常が地獄と化す。

これは、学園黙示録の二次創作作品です。

思いつきで書いたので読んでくだされば幸いです。

日本到着く出会い

俺の名前は、夜神正^{やがみただし}、家族は俺が小さい時に事故で死んでしまった。その後は、親戚をたらいまわしにされてすごした。そして、俺が6歳のときにある男に出会った。俺はその日川の辺で考え事をしてた。その頃の俺は、親戚をたらいまわしにされたこともあり精神年齢が6歳児それより大きく成長していた。自分の考えをしつかり持っていたのだ。後ろから誰かが近づいてくる。近づいてきたのは、男で年齢は30歳前半だと思われる。男は俺の隣に腰を下ろすと、俺に話しかけてきた。

「お前、力が欲しくないか？」

「え……」

俺は驚いたなぜ今来たばかりの男が俺の考えていることがわかったのか。男は、俺の驚いた顔を見てしてやったりとした笑みを浮かべていた。

「なぜわかったって顔をしてるな。そんなの簡単だ、そうゆう顔をしていたからだ。そしてどうする、が欲しいか？」

俺は少し考えた。

「僕は、……力が欲しい」

俺は男の目をみてしっかり伝えた。

「よし、いいだろう。小僧、俺について来い。俺は、^{うらべへいじ}卜部兵治だ。

お前の名前は？」

「僕は、夜神正」

それが、俺と卜部兵治とゆう傭兵の出会いだった。俺は、その後兵治のおっさんに連れられて世界のさまざまな紛争地域を転々とした。そこで、俺はさまざまな技術を身に付けた。

そして、俺が15歳の時に、兵治のおっさんが最近仕事がひとだんらしくしたから日本にかえって学生生活をおくってこいと言ひ出し

た。俺は、もちろん反論した。

「今さら、普通の学生生活に戻るわけないだろ。この前の対戦車地雷でおかしくなったか？」

「はははははは。まあ、そう言うなこれもいい経験だ。ちなみに俺はまだ正常だ。」

「たく、あんたは言い出したらききやしないで、いつ日本に行けばいいんだ？」

「明日の便で日本に飛んでくれ、今日のうちに荷物まとめとけよ」「明日から、仕方ない荷物まとめてくるか。」

次の日、俺は朝早く空港に向かった。空港のロビーには、

朝早いのにちらほらと人がみられる。俺は、空港で見送りを受けた。「日本に行っても元気でな。必要な物があればメールよこせ宅配で送ってやる。あとむこうにある武器倉庫は、好きに使っていいぞ」

「ああ、わかった。何かあれば連絡する。そんじゃ行ってくる。」

「おう、きおつけてなせいぜい楽しんでこい」

そうして、俺は日本に旅立った。

俺は、日本の太平洋に面した人口100万人級の地方都市、床主市どこのすしの床主洋上国際空港に到着し、船で床主市へ渡った。

そして、今俺は腹が空いたので飲食店を搜索中なのだが全く見つからない。周りは、服や靴などファッション関係の店が並んでいる。

「さすが日本いろいろな物があるな」

少し歩いていると人氣がなくなってきた。その時、少女の声が聞こえてきた。

「やめて！離して！！」

それに混じって男の怒鳴り声も聞こえてきた。

「くっ、大人しくしろ！」

「おい！早く車に乗せろ！」

「わかってる！！」

俺は、声のするほうまで行き物陰から男たちと少女を確認した。そ

ここには、黒の車が止めてあり車に男たち3人が少女を無理やり乗せようとしていた。誰がどう見ても誘拐だな、白昼どうどうよくやるな。

「おっと、そろそろ助けるか」

俺は、走り出して一番背が高い男の背中にとび蹴りをくらわせた。男はいきよいく車窓ガラスに突っ込んだ。とても痛そうだ。他の二人の男は、俺の突然の乱入により反応来ていない。俺は、つかさずもう一人の鳩尾に肘をたたきこんだ。

「がはっ!!」

男は、苦しそうや声をあげて崩れ落ちた。もう1人の男は2人目がやられてからやっと我に返った。

「てめー!!」

男は、叫ぶと少女を離しナイフを取り出した。ナイフは折りたたみ式のホームセンターなどで手に入るものだ。

「!!」

少女は、ナイフを見て息をのんだ。男はそのままナイフを突き出して向かってくる。全く素人だな、俺は心底そう思った。

男が突き出してきたナイフを受け流し足を掛けて転ばせた。男は、突っ込んできた勢いのままこけた。俺は、ナイフを持っていた手を思い切り踏みつけた。バキ!ベキ!

「がぁぁー!!」

男の手からいい音がして男がのた打ち回っている。俺は、固まっている少女に話しかけた。

「君、怪我はない?」

少女は緊張しているのか慌てて答えた。

「はい! 大丈夫です!」

少女は、少し頬を赤くしたので不思議に思ったが気にしないように会話を続けた。

「それは、よかった。ところで警察に連絡してもらえるかい? 自分は、この町に着いたばかりで場所がわからないんでいいかな?」

「はい。わかりました。」

少女は落ち着きを取り戻したのか、警察にしっかりと何があったのか伝えていた。日本について早々問題に巻き込まれたな。

「俺これからうまくやっていけるかな。」

俺は一人でぼそっとつぶやいた。

??? side

私は、今日服を観に町に来たのはよかった。だが、人気がないところに来て突然、車が私のちかくに止まった。すると車から男が3人降りてきて私を車に乗せようとしてきた私は、もちろん抵抗した。

「やめて！離して！！」

私は、叫んだ。

「くっ、大人しくしろ！」

「おい！早く車に乗せろ！」

「わかってる！！」

男たちは、3人がかりで私を車に押し込もうとしてきた。

そこで、一番背が高い男が車の窓ガラスに突っ込んだ。私は、何が起きたのかわからなかった。

今度は、違う男が苦しそうな声を挙げて崩れおちた。

「がはっ！！」

私は、やっと何があったのか理解した。目の前に黒いコートを着た黒髪の少年が男たちを倒したのだと。

最後の男もやっと状況を理解したのか。

「てめー！！」

叫びながらナイフを取り出した。

「！！」

私は、息をのんだ。

男が持っているのは折りたたみ式のナイフだが、急所に刺されれば大怪我ではすまない。男は、私を掴んでいた手を離すと少年に突き出しながらむかっていった。

私は、とっさに危ない！と叫ぼうとしたが叫ぶ前に少年が男に足を掛けた。男は少年に向かったいきよいのまま地面に顔面を強打した。少年は、冷静に男に素早く近づいていきナイフを持っていた手を踏みつけた。手からは、バキ！ベキ！といやな音が聞こえ男が痛みでた打ち回っている、あれではナイフはもう握れないだろう。少年は、私に近いてきて声を掛けた。

「君、怪我はない？」

私は、固まったこれだけの事をしたのだただの一般人ではないと思いを言うのかと思っていたらやさしげな声で私を心配してきたのだ。私は慌てて答えた。

「はい！大丈夫です！」

とても恥ずかしい。少年は、気にしていないのかそのまま会話が続いた。

「それは、よかった。ところで警察に連絡してもらえるかい？ 自分分は、この町に着いたばかりで場所がわからないんでいいかな？」
この人町の外の人なんだと思いながら返事をした。

「はい、わかりました。」

私は、すぐに警察に連絡した。連絡をし終わり、少年をみると少年は空を見ていた。

そのときの風にゆれた少年の黒髪と黒いコートを目にして思わず見とれてしまった。

〃人物紹介〃（前書き）

どうも89Rです。

この作品を読んでいただきありがとうございます。

一応この作品は，原作になるべくそって書いていくつもりです。
感想や意見などありましたら，よろしくお願いします。

〜人物紹介〜

夜神 正 やがみただし

身長 178センチ

体重 72キロ

顔立ちは、機動戦士ガンダムSEED DESTINYに出てくるシン・アスカの髪と目の色を黒にした感じ、以外にもてる本人は気がついていない。

服装は白のブレザーに黒いズボン、黒いコート、コンバットブーツ。

学生生活を送るようになって制服で過ごすことが多い。

世界中の紛争地域を回っていたのでさまざまや技術を身につけた。射撃，CQC，料理，ナイフ技術などなど幅広く。剣術もそれなりに出来て自分ではなかなか使えると思っているが周りから見たら達人レベル。

仲間や知り合いなどは命をかけて守り，それらに害する敵には，容赦しない。

冷静で仕事にはまじめに取り組む。

年上に見られやすくその事を少し気にしている。

随時更新していく予定です。

〃人物紹介〃（後書き）

部活で合宿が連続であったりインターハイなどがあるため次の作品までは、少し間が開くと思います。
すみません。

高城家

彼女が警察に連絡を入れてしばらくするとパトカーが来たそれから俺と襲われていた彼女はパトカーの中で簡単な事情聴取を受けてまた後日、床主東警察署で事情聴取を受けることになった。

事情聴取がすみ襲われていた彼女がお礼を言ってきた。

「先ほどは助けていただきありがとうございました。」

彼女はそう言うと言を下げた。

「いいえ、気にしないで下さい。どちらか怪我がなかったんでそれでいいじゃないですか。」

「あの・・・お礼がしたいので私の家にいらっしやいませんか？」

俺は少し考えた。そういえば俺なんにも食べてなかったな。

「すみません。食事をしてからでかまわないならいいですよ。」

「わかりました。あっ、それでは私の家で食事をするとうのはどうでしょうか？」

「迷惑でなければかまいませんよ。」

「大丈夫です。あなたは私の命の恩人ですから。それじゃあ少しまってください迎えを呼びますので」

彼女はポケットからピンクの携帯を取り出すと誰かに連絡をした。

しばらくすると俺と彼女の前に黒塗りの高そうな車が止まり中から黒の制服のようなものを着た男性が降りてきた。

「お待たせしました。どうぞなかえ。」

男性はそう言うと言車の後部座席のドアを開けた、彼女は

「ありがとう」

と言って車に乗った。俺もそれに続いた車に乗るときにドアを開けてくれた男性が俺を警戒するように睨んでいたが俺は馴れているので気にしなかった。

車はファッシュン関係の通りから住宅街に入ったところでお互いに自己紹介をした。

「俺は、夜神 正すきに呼んでくれ」

「私は、高城^{たかぎ} 沙耶^{さや}といいます。あの・・聞いてもいいですか？」

「答えられる事なら」

「あの時何で私を助けてくれたんですか？」

彼女は俺がなぜ助けたのか知りたいらしい特に理由はないんだけどな。

「特に理由はないよ助けたかったから助けただけ」

俺はきっぱりと言った。

「助けたかっただけってそれで怪我したらどうするんですか。」

「大丈夫、あんなことで怪我なんてしないから」

「あんなことって今までどんな所にいたんですか。」

あれおかしいなあきれられているような気がする。まあ気にしないでおこう気にしたら負けだ。

「俺は前まで中東で仕事していたからさっきみたいなのは日常茶飯事だよ」

「仕事って、今何歳ですか？」

「一応15歳だけど」

「15歳！私の一つ上じゃないですか。私はてっきり18歳だと思っていました。」

「俺やっぱり年上に見える。」

そういえば中東にいた時も年上にみられていたな。

そんなことを思っていると車が止まったどうやら着いたようだ。

車を降りるとさっきの黒い服を着た人たちがずらり道の脇に並んで玄関まで立っていた。

ちらほらとちがう色の服を着た人たちも混じっている上下関係があるようだ。

その中を俺と高城さんは歩いていく玄関に優しそうな女性と鋭い視線で俺を見るがっしりとした男性が立っているおそらく彼女の両親だろう。

「ただいま」

彼女はそう言っていると母親と思われる女性に抱きついた。女性は優しく抱きしめた。

「お帰りなさい、無事でよかったわ。」

彼女は女性から離れると俺を紹介した。

「彼が私を助けてくれた夜神 正さんよ」

「夜神 正です。」

俺は軽く頭を下げた。

「このたびは娘を助けていただきありがとうございました。私は母親の高城 百合子です。」

「私が父親の高城 壮一郎だ。娘を救ってくれて礼をゆう、ありがとう。」

百合子さん、壮一郎さんがお礼を言ってきた。

「いえお気になさらず、助けたくて助けたのでただの自己満足に過ぎませんよ」

玄関のドアが開きコックの格好をした男性が出てきた。

「奥様、お食事の準備が整いました。」

「ご苦労様、それでは夜神さん中へどうぞ」

「すみません、わざわざお食事を用意していただいて。」

「いえ娘の恩人ですもの当然のことです。」

それから家の中に入り食堂で食事をとった。とても美味しい食事だった。

食事を終えた俺は壮一郎さんから話があるということなので壮一郎さんの書斎へと招かれた書斎には高城さんと百合子さんがいた。

「単刀直入に言う沙耶を助けてくれた君に頼みたいことがある。これからも今回のように沙耶が狙われるかもしれないそのため沙耶の護衛をしてくれないか。」

「パパ！」

壮一郎さんはとんでもないことを言い出した。

自分の娘の護衛をしてくれないかと頼んできた。当然のことながら彼女も驚いている。

「なぜ俺なんですか？もしかしたら俺は今日襲った奴らの仲間かもしれないよ」

俺はかまをかけてみた。

「それはない」

壮一郎さんは面と向かって言ってきた。俺は理由を聞いた。

「目だ。」

「目？」

「目はその者の心を映し出す。悪しき者の目は濁っているが、清きものの目はどこまでも澄んでいる。」

君は真っ直ぐな目をしているだからこそ娘の護衛を頼んでいる。」

「俺は別に構いませんよ前のいたところでも似たような仕事はやっていましたから。ただし沙耶さんの意見も尊重してあげて下さい。」
俺は警護するのはいいが無理やり決められるのは好きじゃない。彼女の気持ちも考えて欲しい。

「いいだろう、沙耶今ここで夜神君を護衛にするかきめなさい。」
彼女は少し考えて決意がこもった目になった。彼女は俺の目の前で来ると

「・・・私の護衛を・・・その・・・引き受けていただけですか？」
彼女はとても不安そうに聞いてきた。俺はそれに笑顔で答えた。

「俺でよろしければ。知り合ったのも何かの縁です引き受けましょう」

彼女は顔を赤くしながら言ってきた。

「あの・・・その・・・よろしくお願いします。」

その時の彼女はとても可愛いと正直思った。

壮一郎 Side

今日、沙耶が襲われたと警察から連絡があった。幸いにもそこに居合わせた少年に助けられて怪我は無いらしい。助けてくれた少年に私は少し興味を持った。車が着いたようだ車から沙耶と沙耶を救っ

てくれた少年が降りてくる周りには部下が並んでいるためかなりの威圧感があるはずなのだが全く気にしていない私のところに来ても全く怖気ずいていない。雰囲気は年上に見せているが沙耶とあまり変わらないと私は思った。食事の後彼を私の書斎に招き入れた。私は単刀直入に聞いた。

「単刀直入に言う沙耶を助けてくれた君に頼みたいことがある。これからも今回のように沙耶が狙われるかもしれないそのため沙耶の護衛をしてくれないか。」

「なぜ俺なんですか？もしかしたら俺は今日襲った奴らの仲間かもしれないよ」

夜神君は私にかまを掛けてきた。おもしろい。

「それはない」

私は面と向かって言った。夜神君は理由を聞いてきた。

「目だ。」

「目？」

「目はその者の心を映し出す。悪しき者の目は濁っているが、清きものの目はどこまでも澄んでいる。」

君は真っ直ぐな目をしているだからこそ娘の護衛を頼んでいる。「私は今までこんな真っ直ぐな目をした者にあつたことが無い夜神君になら沙耶を娘を任せられると不思議と私は思えた。」

「俺は別に構いませんよ前のいたところでも似たような仕事はやっていましたから。ただし沙耶さんの意見も尊重してあげて下さい。」夜神君は私に沙耶の意見も聞いてくれと言ってきた。ますます気に入った。

「いいだろう、沙耶今ここで夜神君を護衛にするかきめなさい。」私は沙耶に全てゆだねる事にした。今思えばこれが初めてかもしれない。

沙耶は少し考え決意のこもった目をして夜神君の前に行き言った。

「・・・私の護衛を・・・その・・・引き受けていただけますか？」

沙耶はとても不安そうに聞いてきた。夜神君はそれに笑顔で答えた。

「俺でよろしければ。知り合ったのも何かの縁です引き受けましよう」

沙耶は彼を受け入れたようだ。これからが楽しみだ。

壮一郎out

百合子Side

今日、沙耶ちゃんが襲われたと警察から連絡があった。偶然居合わせた少年に助けてもらったそうだが、まるで白馬の王子様ね。沙耶ちゃんがお食事に王子様を招待したそうだなんでもまだこの町に来たばかりだったそうだと決まれば料理長に おすすめを用意してもらいましょう。

「料理長お食事を用意してくれるかしら、メニューはあなたのおすすめでかまわないわ」

「かしこまりました。」

そうゆうと料理長は厨房へ向かった、さて準備は出来たは早くあつてみたいわ。

車が着くと中から沙耶ちゃんと後ろから雰囲気大人っぽい少年が降りてきた。

お食事が終わり壮一郎さんの書斎で夜神さんに沙耶ちゃんの護衛になつてくれるよう頼んでいる。

壮一郎さんが夜神さんの目が真っ直ぐだと言った確かに真っ直ぐで綺麗な目をしている沙耶ちゃんにぴったりだわ。

「・・・私の護衛を・・・その・・・引き受けていただけますか？」

沙耶ちゃんのはとても不安そうに聞いてきた。夜神さんはそれに笑顔で答えた。

「俺でよろしければ。知り合ったのも何かの縁です引き受けましよう」

沙耶ちゃんは顔を赤くしながら言った

「あの・・・その・・・よろしくお願いします。」
沙耶ちゃんったらお顔真ッ赤にして可愛い。これから楽しみだわ。
頑張るのよ沙耶ちゃん。

百合子out

編入そして新たな出会い

俺はその後壮一郎さん、百合子さん、高城さんと少し話しをした。俺は床主市第三中学校に編入する予定なのだが、高城さんも床主第三中学校の生徒だそうだ。

これで少しは守りやすくなるな。

俺はそれから高城家を後にした。高城さんは俺を門まで見送りに来てくれた。

「あのっ・・・今日は・・・本当にありがとうございました。私の護衛を引き受けてくれて・・・／＼」

彼女は顔を赤くしながらあらためて今日のことについてお礼を言ってきた。

「気にしなくていいよ。でも、まあどういたしましてこれからよろしく高城さん。」

「そのよかったら、私のこと・・・沙耶って呼んでくれませんか？」高城さんは上目ずかいで頼んできた。柄にもなくドキッとしてしまった。

「わかった、呼ばせてもらう。沙耶、俺のことも正でいい口調も崩すぞこっちの方が話しやすい。」

俺がそう言うのと沙耶はまんべんの笑みで答えた。

「はい！正先輩。」

その時の彼女の笑顔は、その日俺が見た彼女の一番の笑顔だった。

沙耶の見送りを受けて高城家を出た俺は前もって借りておいた川沿いに立っているメゾネットに向かった。

メゾネットについて初めに目に入ったのが駐車場に止めてあったハンヴィーだった。しかも軍用モデル、1985年からアメリカ軍に配備され始め、先のイラク戦争でも兵士たちの足として活躍した。俺も中東にいたときによく乗ったな。

大家さんに話を通して部屋に向いちょうどそこにお隣の人が部屋から出てきた。

「こんにちわ、隣に越してきた夜神 正です。正って読んで下さい」
俺はお隣の人に挨拶をした。やっぱりお隣の人との関係は大切だろう。

「ああ、君が新しいお隣さん？初めまして私は南リカ。みなみリカでいいわ。」

彼女も自己紹介をしてきた。そのときリカさんから微かに煙硝の匂いがした。

普通の人にはわからないだろう。おそらくクレーン射撃をやっているか自衛隊もしくは警察関係の仕事をしているのだろう。

「やばっ遅れる。そんじゃまた今度ね。」

「はい、お気おつけていってらっしゃい。」

「いってきます。」

リカさんはそうゆうと駐車場に止めてあったハンヴィーに乗り込んでエンジンをかけてどこかに向かった。やっぱりあのハンヴィー、リカさんのだったんだ一般人が軍用ハンヴィー普通持ってないからな

俺はそんなことを思っていた。

次の日、俺は高城家へ沙耶を迎えに行き沙耶と一緒に学校に登校した。登校途中に沙耶の友達に会った。

「よう、高城おはよう。えっとそっちの人は？」

沙耶と同じ年だろう。

「おはよう、小室。紹介するわこっちの人は夜神 正さん私たちの先輩になる人よ。」

沙耶が俺を紹介してくれたので、自己紹介をした。

「よろしく夜神 正だ。好きに呼んでくれ」

「はい、よろしくお願いします。僕は小室 こむろ 孝たかしです。孝って呼んで下さい。」

「わかった。ところでそろそろ行こうか沙耶初日から遅れるのはまずい。」

俺は時計を見ながら言った。

「そうですね、急ぎましょう。」

小室も一緒に学校に着いてから分かれた。今は沙耶に職員室に案内してもらっている。

案内してもらっている時女子生徒からの視線が俺に多く向かっていたが俺は気にしないように沙耶についていった。

「なにからなにまですまないな、沙耶ありがとうな。」

俺は軽く微笑んだ。

「いえ、気にしないで下さい／＼。それじゃ私はここで失礼します。」

沙耶は顔を赤くしながら自分の教室へ向かった。

気のせいだろうか俺のそこを見ている周りの女子の顔も赤くなっている気がするまあいいか。

俺は職員室に入り担任に連れられて教室へ向かった。

担任の先生はとても穏やかそうな男性だ。

「それじゃあ夜神君、呼んだら入ってきてくれ。」

「はい、わかりました。」

俺が返事をするとう先生が教室へ入っていた。

「おいみんな静かにしろ、今日からこのクラスに編入生がくる入ることになった。夜神君入ってきてくれ」

「はい、失礼します。」

俺がクラスに入るといろいろな声が聞こえてきた特に女子から。

「うわっ、かっこいい」

「このクラスでよかった」

「たべられたいな／＼」

おいおい1番目の奴はいいとして2番目の奴このクラスにも俺よりいい奴がいるだろそして、3番目のやつ物騒なことって顔を赤くするな。

「それじゃあ夜神君自己紹介を」

おっとそうだった。

「夜神 正です。前まで中東にいたのでわからない事もあると思うので短い間ですがよろしくおねがいします。」

「それじゃあ席はあそこの空いてる席で。」

「はい、わかりました。」

俺は空いていた席に座って担任の短い話が終わりホームルームが終わった。

休み時間に入り隣の女子に話しかけられた。

「ちよっといい夜神君、はじめまして私は宮本 みやもと 麗 れいよ。気軽に麗でいいわ。よろしくね。」

「こちらこそ、俺のことも正でいい。」

その後クラスメイトから質問攻めにあいとても疲れた。

そんなこともあり数ヶ月がたった。クラスにもなじみ沙耶に町を案内してもらったり、壮一郎さんが会長を勤める「憂国一心会」の人達に重火器の扱いなどを教えたりついでに港にあった兵治から言われていた武器庫の中身を高城家へ全部運んだ相当な量だった戦争でもできるんじゃないか。

そして孝、麗とも仲良くなった。

学生生活もまんざらでもないな、そんなことを思いながら左手にスパーのビニール袋を持って家に帰っているとふと視界に知っている人物が通り過ぎた。

左手に鞆を持ち右手に木刀が入っていると思われる袋を持っている雰囲気は大人びているがどこか幼さを感じさせる容姿、剣道部主将、毒島 ぶくしま 冴子 さくこ 剣道の強さは他に比べ群を抜いている。毒島さんの少し離れたところを酔っ払っているのか足元がおぼつかない男が後をつける様についていった。もし襲われても毒島さんなら大丈夫だと思いがまんがいち何かあれば目覚めが悪い。俺は毒島さんと男を追

かけた。

人気がなくなりどんどん暗くなってきた何も起きなければそれに越したことはないのだがその期待はすぐ消えた。男が毒島さんを無理やり抱きしめフェンスに押さえつけた。俺は一気に距離を詰めようとしたがその前に毒島さんが動いた。

木刀を男に目にもとまらない速さで振り下ろした。

「ぎゃああああ！！」

男の悲鳴がとどろいた。

あれは骨までいつてるな俺はそんなことを思いながらまだ倒れている男に木刀を振り下ろそうとする毒島さんを止めるため一気に距離を縮めた。木刀が男をとらえる瞬間俺は腰から護身用に持ち歩いていたナイフを鞘ごと引き抜き男と木刀の間に割り込んだ。毒島さんは驚いていた。

「だめですよこれ以上は、こいつが死んじゃいますから。すみませんが木刀を下ろしてくれませんか」

「・・・」

彼女は無言で木刀を下ろした、だが俺が妙な行動をすればいつでも動けるように警戒している。

「そんな警戒しないで下さい。今、警察と救急車を呼ぶのでここに居てくださいよ。」

俺がそんなことを言ったら

「わかった」

彼女は一応俺を信用してくれたようだ。

それから俺は男に応急処置をしてから連絡を入れて駆けつけた救急隊に男を引渡し警察の事情聴取を毒島さんと受けて今彼女の家に彼女を送っている。その途中彼女はお礼を言ってきた。

「さっきは止めてくれてありがとう。あのままだったらさっきの男を殺してしまっていたかもしれない。」

彼女は頭を下げてきた。

「いいですよお礼なんてもっと早くに俺が駆けつけていればこうは

ならなかったんです。謝るのはこっちです遅れてすいません。」
俺も頭を下げた。

その時の様子が二人ともおかしくて笑ってしまった。

「自己紹介がまだだったな俺は夜神 正。正でいい。」

「私は毒島 冴子私も冴子でいい。」

それから家に着くまでいろいろなことを話した。とても楽しい時間だった。

「ここが私の家だ。」

冴子が立派な門の前で立ち止まった。武家屋敷を思わせる門だ。

「それじゃあまたな。そうだ今度また会ったら試合しようぜ。」

「ふふ、わかった。楽しみにしている。それでわな」

「ああ、またな。」

俺たちはそこで分かれた。

冴子Side

私は後ろから近づいてきた男に抱きつかれてフェンスに押し付けられた。

もちろん私は抵抗した持っていた木刀で男を叩きのめした。

男はアスファルトの上でもがき苦しんでいる。私はその時自分でもわからない感情が芽生えた。

男にとどめをさそうと木刀を振り下ろした。そこに見知らぬ男が倒れている男をかばう様に私の木刀をナイフの様な物で受け止めた事に私は驚いた、その時木刀を受け止めた男が口を開いた。

「だめですよこれ以上は、こいつが死んじゃいますから。すみませんが木刀を下ろしてくれませんか」

「・・・」

私は無言で木刀を下ろした、だが男が妙な行動をすればいつでも動けるように警戒している。

「そんな警戒しないで下さい。今、警察と救急車を呼ぶのでここに

居てくださいよ。」

男が困ったような顔をして言った。

「わかった」

私は一応、信用することにした。

それから男は倒れている男に慣れた手つきで応急処置をしてから携帯を取り出し連絡を入れて駆けつけた救急隊に男を引渡し警察の事情聴取を私と受けた今私の家に送ってもらっている。

その私は先ほどのことにお礼を言った。

「さっきは止めてくれてありがとう。あのままだったらさっきの男を殺してしまっていたかもしれない。」

私は頭を下げてきた。

「いいですよお礼なんてもっと早くに俺が駆けつけていればこうはならなかったんです。謝るのはこっちです遅れてすいません。」

男の方も頭を下げた。

その時の様子がおかしくて笑ってしまった。

「自己紹介がまだだったな俺は夜神 正。正でいい。」

男が自己紹介をしてきた。

「私は毒島 冴子さうこ私わたしも冴子さうこでいい。」

私の自己紹介をして、それから家に着くまでいろいろな話を話した。久しぶりにとっても楽しい時間だった。

「ここが私の家だ。」

私がそうゆくと正が、

「それじゃあまたな。そうだ今度また会ったら試合しようぜ。」

「ふふ、わかった。楽しみにしている。それでわな」

「ああ、またな。」

私たちはそこで分かれた。

私が惹かれるほどの男か面白い。

冴子Out

編入そして新たな出会い（後書き）

ご意見や感想があればおねがいします。

藤美学園・麗の留年（前書き）

投稿が遅れてすみません。
どうぞお楽しみください。

藤美学園・麗の留年

それから、冴子の事を沙耶に話したら沙耶が、俺にいろいろと質問いや尋問をしてきた。俺は冴子はただの友達だと言うと、やっと質問といゆなの尋問から開放された。

しばらくして無事、俺は床主第三中学校を卒業した。

俺は、麗と冴子と同じ藤美学園ふじみがくえんに入学した。

そこそこの学力がないと入学できないのだが、俺は主席で入学した。入学式の代表挨拶では、視線が痛かった特に女子の。

校長の挨拶では、大抵の生徒はまじめに聞いてなかったが、俺が壇上に登壇すると空気が変わった。めんどくさそうに話を聞いていた生徒がいつせいに俺に目を向けた、それから代表の言葉を言い終わると大きな拍手が体育館の中に響き渡った、校長の時の拍手よりも大きかった可哀相だな校長。

藤美学園は、床主市の西側にあり、全寮制の私立高校だ。剣道部のほかに槍術部があるなど尚武の気風がある。また、学習設備も充実しており、校舎の屋上には、本確的な天文台が備え付けられている。

校舎は二棟あり正門から向かって右側が教室棟、左側が特別教室や職員室がある管理棟となっている。両校舎と体育館は渡り廊下で繋がっており、施設間の行き来は容易。校舎の周辺や敷地の外周部には、多くの桜が植えられている。

俺は、いろいろな部活から声がかかったがどれも断った。麗と冴子は、麗は刑事である親父さんの影響で槍術部に、冴子は中学の時と同じで剣道部に入部した。

高校に入ってもちゃんと学校が終われば沙耶を迎えに行き高城家に送るとゆう護衛の仕事は続けている。

あつとゆうまに1年が過ぎ俺たちは、2年へと進級をした。そして、新たに新入生として沙耶と孝が入学してきた。

俺が入学式が終わってから沙耶に入学祝で、手料理を作ったらとても喜ばれた。

だいぶ新入生が学園生活に馴染んできた時に、冴子が剣道の全国大会で優勝した。

俺は、冴子の自宅で手料理を振舞った。

「全国大会優勝おめでとう、どんどん食べてくれ。」
テーブルには、和食料理が並んでいる。

「これは、全部正が作ったのか？」

冴子は、俺が料理が出来るとは思わなかったようだ。

「ああ、もちろん。味は自信があるから心配するな。」

冴子は、恐る恐る料理を食べた。

「・・・！！」

俺は、冴子のさらに驚いた顔を見て微笑んだ。

「／／・・・あの、そのあれだそんなに見られていたら恥ずかしいせかつくの美味しい食事だ冷めないうちに食べよう。」

冴子が美味しいと言ってくれた。素直にうれしい。

「おう、そうだな。」

それから、2人で食事を楽しみおひらきにした。

3年になり俺と冴子は、進学したが麗は留年した。

あのまじめな麗が、留年するはずがない。いろいろと調べてみると麗の成績を改竄かいざんした人物が出てきた。

世界史の教師、紫藤しどう 浩一こういちだ。

紫藤しどうの父親、傲慢かつ非道な地元ろの有力代議士である、紫藤しどう 一いち

郎の汚職を麗の親父さんが捜査していたようだ。おそらく紫藤議員の命令で、成績を改竄したのだろう。

だが理由は、どうあれ俺の友達に手を出したからには、ゆるさない。

俺は、深夜紫藤議員のオフィスへと侵入した。そこで、汚職に係する資料を片っ端から見つけ出し警察へ封筒で送った。もちろん、指紋や俺に繋がる痕跡は残してない。

次の日、俺は麗に話があるため2年B組の教室に放課後訪れた。

麗はいろんなものを一人で抱えすぎている。

教室では麗と孝が話をしていた。

「どうして留年なんかしたんだよ？優等生なのに……」

「孝には……わからないわ!!」

麗の声が声が響いた。

「わから……ないわ。」

麗が、教室から出てきた。目には涙が見られたが、俺を見ると涙をぬぐって無理に笑顔をつくった。

まったく心配ばかりかけやがって。

「正先輩、どうしてここに？」

「ちょっとな、お前に話があってな。」

「えっ、どうしてですか？」

「理由は場所を変えてから話す、ここだと人目につくからな。」
俺がそう言っただけで麗の手を握ってつれていこうとしたら

「はい、わかりました……」

と顔を赤くしながらついて来た。

屋上に着き、俺は麗に単刀直入に言った。

「麗ここに呼んだのは、留年の件だ。」

麗の表情が変わった。

「先輩は他の人とは違うと思っていました。」

麗は俺を睨みながらそう言った。

「紫藤・・・」

「!!」

「俺は、お前が留年するはずがないってわかっているからいろいろ調べてみた。そうしたら紫藤が出てきた。俺には許せないことがある。まず、俺の友達に手を出す奴そして、なにもかも一人で抱え込もうとする奴。お前は、一人で抱え込んでどうする？」

「・・・」

「少しは、俺も頼れよ。迷惑がかかるそんなの知るか、お前が俺に助けを求めれば俺はそれに全力で、答えてやる。」

俺は、麗の目を見てはつきりとそう言った。麗は泣きながら俺に抱きついてきた、一人でずっと耐えていたのだろう。俺は、麗が落ち着くまで抱きしめた。

「落ち着いたか？」

「ええ、ありがとう正」

口調も先輩、後輩ではなく一人の友人として。

それからとゆうもの麗が、俺と沙耶と一緒に帰るようになった。両手に花だ、周りの男子の視線が痛い。

麗Side

私は孝から留年の事について聞かれた。

「どうして留年なんかしたんだよ？優等生なのに・・・」

「孝には・・・わからないわ!!」

私は、頭にきた何も知らないくせに。

「わから・・・ないわ。」

私は、教室から出たそのとき正先輩がいた。

私は、急いで涙をぬぐった

「正先輩、どうしてここに？」

「ちょっとな、お前に話があつてな。」

「えっ、どうしてですか？」

「理由は場所を変えてから話す、ここだと人目につくからな。」

正先輩が私の手を握ってきたドキッと心臓の鼓動が聞こえた。

「はい、わかりました・・・／＼」

私は、素直に正先輩について行った。

屋上に着き、正先輩は私に聞いてきた。

「麗ここに呼んだのは、留年の件だ。」

「先輩は他の人とは違うと思っていました。」

睨みながらそう言った。

「紫藤・・・」

「！！」

「俺は、お前が留年するはずがないってわかっているからいろいろ調べてみた。そうしたら紫藤が出てきた。俺には許せないことがある。まず、俺の友達に手を出す奴そして、なにもかも一人で抱え込もうとする奴。お前は、一人で抱え込んでどうする？」

「・・・」

私は何もいえなかった。

「少しは、俺も頼れよ。迷惑がかかるそんなの知るか、お前が俺に助けを求めれば俺はそれに全力で、答えてやる。」

正先輩は、私の目を見てはつきりとそう言った。私は泣きながら正先輩に抱きついた、一人でずっと耐えていたいつか解決するとしてもつらかったけど、この人は私に手を差し伸べてくれた。

「落ち着いたか？」

「ええ、ありがとう正」

先輩、後輩ではなく前の私として、夜神 正という男性が好きな女子としてお礼を言った。

絶対に逃がさないわよ。

麗Side out

藤美学園・麗の留年（後書き）

どうも89Rです。

また合宿が、あるためまた間が開くと思います。

本当にすみません。なるべく早く投稿できる用に頑張りたいと思います。

次は、いよいよ原作に突入予定です。

ご意見、ご感想があればよろしくお願いします。

世界が終わってしまった日（前書き）

どうも89Rです。

やっと書き終わりました。

お楽しみください。

世界が終わってしまった日

俺は、血だらけの制服を着ている男子生徒の頭にコンバットナイフを深々と突き刺した。

深々と刺さったコンバットナイフを素早く抜き、男子生徒は廊下に出て来た血の池に倒れ二度と動かなくなる。

鉄くさい血の池は、それだけではなくそこらじゅうに出てきている。人の手足、肉の破片それに人間「だったもの」がまた血の池をつくっている。

感性が正常な者は、吐いたりするのだろう。だが、あいにく俺の感性はとうの昔に壊れている。

人を殺しても何も感じない。

戦場では、トリガー（引き金）引けない者は死ぬ……。校舎からは窓ガラスが割れる音、悲鳴が聞こえてくる。

まったく、どうなってんだか。

二時間前

いつものように教室棟で授業を受けていた。

「ん？」

俺の席は、窓際の一番後ろだ。そのため窓の外も見える。

微かにだが銃声の音が町のほうから聞こえた。

教室棟から町の音はほとんど聞こえない、管理棟が町と教室棟の間に建ち町の騒音を遮断しているのだ。そのため町の様子がわかりづらい。

また、銃声が聞こえた。

これは、どう考えても異常だ。日本の警察は、拳銃の発砲を極力行

わない。

平和すぎるからこそ、銃を発砲するとゆう行為をした警察官は世間からの風当たりが激しい。

そんなことにも構わず拳銃を発砲している。他にも猟銃の銃声も聞こえてきた。

確実に何かが起こっている。

そんな時、校内放送が入った。

「全校生徒・職員に連絡します！ 全校生徒・職員に連絡します！現在、校内で暴力事件が発生中です。生徒は職員の誘導に、従って直ちに避難してください！！」

当然ながら突然の放送にクラスがどよめく。しかし、それもすぐに納まった。

スピーカーから聞こえてきた声によって。

「繰り返します。現在、校内で暴力事件が発生「ブチッ！」・・・」「キィ・・・ィ」・・・「ガキン・・・」ギャアアアアアッ あっ、助けてくれっ 止めてくれっ ひいひいっ たすけっ ひいっ 痛い痛い痛い痛い！！ 助けてっ 死ぬっぐわああああ！！」 し・・・ん

し・・・ん

静寂が包み込んだ。だが、それも一瞬。

「わああああ！！」

生徒たちが教室の出入り口に殺到した。教室棟は、生徒たちで溢れ帰っている。

教室に、一人残された。

「まったく、結局こうなるのかよ」

俺は、カバンに入っているコンバットナイフを取り出した。

「さて、いきますか」

コンバットナイフをベルトに差した。

俺は、まず沙耶を探す事にした。俺はまだ沙耶の護衛を勤めているからだ。

廊下の角から血で制服を染めた男子生徒が現れた。

俺は、ナイフを腰から抜き、男子生徒に油断なく構えた。

男子生徒の首の頸動脈が何かに食いちぎられたようになっていたからだ。普通は、頸動脈を負傷すれば大体の人間は死ぬ。だが、彼は今俺の前で立って動いている。

「これじゃ、ゾンビだ。全く厄介だよ」

そして、今にいたる。

俺は、男子生徒を片付けて沙耶が行きそうなところを回る事にした。

技術室で頭に釘が刺さっている〈奴らが〉倒れていた。おそらく誰かが、ここで武器を手に入れしとめたのだろう。沙耶かもしれない、そんな事を思った。

途中、見知った顔に出会った。

冴子と校医の静香先生だ。静香先生とは、リカさんの部屋を静香先生が掃除しにきたりしていた時に知り合った。

「!? 正! (正君!)」

「おう、冴子無事で何よりだ。静香先生も大丈夫ですね。」

「正、今ここで起きている事は……」

「俺にもさっぱりだ」

「そうか。でも正が無事で何よりだ」

「俺も、そう簡単にはやられないさ」

パシ　パシッ

「!」

「!」

「冴子・・・・・・・・」

「・・・・・・・・職員室か?」

俺たちは、職員室へ向かった。

「きやあああ」

途中悲鳴が聞こえた。沙耶の悲鳴だ。

俺が、職員室の前に到着すると、沙耶が男性教師の〈奴ら〉に追い詰められていた。

ナイフを男性教師の〈奴ら〉めがけて投げた。ナイフは、真っすぐ男性教師の〈奴ら〉の頭に突き刺さって、男性教師の〈奴ら〉は倒れた。

ちょうど、冴子と静香先生が職員室についたときに孝、麗も合流し〈奴ら〉と化した生徒を片付けた。

麗が沙耶に近づいていく。

「高城さんっ　大丈夫?」

「みやもとお・・・・」

「鞠川校医は知っているな?　私は、毒島　冴子、3年A組だ」

「俺は、夜神　正。知ってる奴もいるが、一応挨拶しておく」

「小室　孝、2年B組」

「去年、全国大会で優勝された毒島先輩ですよね!　わたし槍術部の宮本　麗です」

「あ、えと　び　B組の　平野　（ひらの）こ、コータです」

「よろしく」

「なにさ、みんなデレデレして・・・・・・・・」

「何、言っただよ　高城」

沙耶が叫んだ。

「バカにしないでよ！ アタシは天才なんだから！ その気になつたら誰にも負けないのよ!!！」

俺は、沙耶を抱きしめた。

「もういい、ごめんな怖い思いをさせて。 もう十分だ」

「正・・・先輩・・・う、ううっ ああ ああああ うわあ
ああーん」

世界が終わってしまった日（後書き）

やっと、原作突入です。

ご意見、ご感想があればよろしくお願いします。

感染爆発（前書き）

どうもお久しぶりです。

最近色々な小説を考えていたので、投稿が遅れました。
どうぞ、お楽しみください。

感染爆発

俺たちは、沙耶を落ち着かせてから職員室へと入った。

職員室の中は、教師と教師だったへ奴らともみ合いになったのか、ものが散乱している。

まず俺たちは職員室で休むために入り口にバリケードを作る事にした。

長机、イス、重いダンボールなどを積みイスと長机をビニールテープで巻きつけ、ちよつとやさつとじゃ崩れないようにした。

「みんな息が上がっている、少し休んでいこう」

冴子の言う通りだ。ここにいる俺以外は人の死に慣れていない。人が事故で死んでしまったりしたところを目撃すると大抵の一般人はトラウマになる、どんなに偽ろうとも何らかの変化がある。ならない人は死体や人が死ぬのを見慣れた職業についている者だ。俺は、戦場で人の死になれすぎてしまい何も感じなくなってしまった。いいことなのか悪い事なのかわからない。

「鞠川先生、車のキーは？」

小室が静香先生に車のキーについて聞いてきた。

確かにこの状況で徒歩で外に出たらすぐやられるだろう。

「あ、確かカバンの中に・・・」

「全員を乗せられる車なのか？」

冴子がかさず静香先生に質問をした。

確か静香先生の車は、コンペだった気がするが。

「?つつ・・・コンペです」

「部活遠征用のマイクロバスはどうだ? まだ壁の鍵掛けにキィがある。マイクロバスなら全員乗れるだろう」

マイクロバスの鍵が残っていることに気がつき提案した。

「バスまだあります」

確か平野コータだったな。

「バスはいいけど、どこへ?」

「家族の無事を確かめます」

孝たちは家族が床主市いるが、俺や冴子は国外だ。

「近い順にみんなの家を回るとかして必要なら家族も助けて、その後は安全な場所を探して」

「見つかるはずよ。警察や自衛隊だって動いているはずだから、地震のときみたいに避難所とかが、どうしたの?」

沙耶がテレビを見ていた麗の様子がおかしい事に気がつき話を中断した。

「何なのよこれ・・・」

「麗どうした・・・!」

孝がつかさず何があったのかを聞いた。

冴子が麗が見ていたテレビの音量を上げた。

「……です。各地で頻発する、この暴動に対し政府は緊急対策の検討に入りました。しかし、自衛隊の治安出動については、与野党を問わず慎重論が強く……………」

ニュースでは、リポーターがこの事件について報道していた。孝が言った。

「暴動ってなんだよ暴動って！」

おそらく国民にパニックを起こさせないように暴動として報道しているのだろう。

あたり前か、誰が死人が生き返って生きてる者を襲うなんて信じる。それが本当だとしてた人々はパニックを起こしさらに自体が悪化しかねないからだ。

「……ません。すでに地域住民の被害は、1000名を超えたとの見方もあります。知事により非常事態宣言と災害緊急要請は……………」

パンッ！

俺がよく聞きなれた銃声がリポーターの声をさえぎった。

「発砲です！ついに警察が発砲を開始しました！！いったい何に對して……………」

パンッ！　　パンッ！

リポーターが必死で報道している最中も銃声がとどろいた。

「きゃああああ!!」

リポーターが悲鳴を上げた。

「いや なにつ、うそ助けて、助けっ うわっあああっ!!」

リポーターの助けを求める声と悲痛な叫びが聞こえて画面が切り替わった。

「・・・何か問題が起きたようです。こ、ここからはスタジオよりお送りいたします」

「それだけかよ・・・・・・どうしてそれだけなんだよ!」

「パニックを恐れているのよ」

孝の言葉に沙耶が答えた。

「いまさら?」

「いまだからこそよ! 恐怖は混乱を生み出し、混乱は秩序の崩壊を招くわ。そして秩序が崩壊したら・・・・・・どうやって動く死体に立ち向かえるというの?」

ニュースでは世界中で同じ事が起きていることを報道している。

「朝ネットを、覗いた時はいつもどうりだったのに・・・・・・」

「信じてない、信じられない・・・・・・たった数時間で世界中がこんなになるなんて。ね、そうですね? 絶対に安全な場所、ありますよね? きっとすぐいづもどうりに・・・・・・」

麗が俺の袖を掴み不安そうに聞いてきた。俺が答えようとする前に沙耶が答えた。

「なるわけないし！」

「そんな言い方することないだろ」

孝が沙耶の厳しい言葉に言い返した。

「パンデミックなのよ仕方ないじゃない」

「パンデミック・・・」

「？」

静香先生はわかったみたいだが、孝はわからないようだ。

おい、孝もう少し授業しっかり受けとけよ。

「感染爆発か」

俺は答えた。

沙耶はうなずいた。孝はいまいちわかっていないようだ。

「はー、つまりは世界中で同じ病気が大流行しているってことだ。わかったか孝」

「インフルエンザみたいなものですか？」

「まあ、そんな感じだ」

俺の言葉の後に、沙耶がスペイン風邪などを例えて説明してくれた。

その説明に孝が質問した。

「どうやって病気の流行は、終わったんだ？」

その質問には俺が答えた。

「いろんなことが考えられるが、大抵は人が死に過ぎると終わる。感染する奴がいなくなるからな」

「でも、死んだ奴らはみんな動いて襲ってきますよ」

「そこが問題だ。……拡大が止まる理由がない」

「これから熱くなるし肉が腐って骨だけになれば動けなくなるかも」
「どれ位でそうなるのだ？」

冴子が静香先生に聞いた。

「夏なら20日程度で一部が白骨化するわ。冬だと何ヶ月もかかる、でもそう遠くないうちには……」

「腐るかどうかなんてわかったもんじゃないわよ」

「どういう意味だよ」

「動き回って人を襲う死体なんて医学の対象じゃないわ。ヘタすると、いつまでも……」

「家族の無事を確認した後どこに逃げ込むかが重要だな。とにかく好き勝手に動いては生き残れまい」

確かに俺も冴子の案に賛成だ。

「チームだ。チームを組むのだ生き残りも拾っていこう」

「どこから外へ？」

「駐車場は正面玄関からが最短ルートだ」

俺はここにいる全員に確認を取った。

「全員準備はいいな？」

俺の言葉に全員が頷く。

「よし！いくぞ」

俺たちの学校からの脱出が始まった。

感染爆発（後書き）

いかがでしたか。

ご意見や感想があればどうぞよろしくお願いします。

学校からの脱出（前書き）

どうもお久しぶりです。
やっと出来上がりました。
お楽しみください。

学校からの脱出

職員室から出るとく奴ら>と化した生徒が2人いた。

パンッ パン

平野が狙いをさだめ撃った。正確な射撃だ。

<奴ら>と化した生徒は頭に、釘を打ち込まれ崩れ落ちた。

先頭は俺と小室，その後ろに冴子と平野，麗，静香先生，沙耶の順番だ。

「最後に確認しておくぞ無理に戦う必要はない。避けられる時は避けろ！ 転がすだけでもいい！！」

「連中，音にはびんかんよ！ それから普通のドアなら破るぐらいの腕力があるから，掴まれたら食われるわ！ 気をつけて！」

冴子と沙耶が念をおす。

確かに奴らの腕力は異常だ。人でなくなったために人の限界を超える事を全く躊躇しなくなったのだろう。人は知らないうちに自分の能力にストッパーをかけている。

「キャアアア」

「！！」

階段のほうから悲鳴が聞こえた。

階段に駆けつけると，バットとさつまたを持っていた男子生徒2人が武器を持っていない生徒を背に，複数の<奴ら>に追いつめられていた。

俺は、ナイフをバットを持っていた男子生徒の前の＜奴ら＞目掛け投擲した。

見事、ナイフは＜奴ら＞に刺さりかたずけた。
冴子たちも合流し、数十秒で全員を片付けた。

「あ、ありが………」

「大きい声は出すな、＜奴ら＞が集まってくる。噛まれた奴等はいるか？」

俺がナイフの血を制服でふきながら女子生徒の言葉をさえぎった。
嫌がらせではない。こんなところで大声を出して襲われるなんてまっぴらだからだ。

「え………いけません、いけません!!」

女子生徒は言われた意味を理解したのか、あわてて答えた。
だから、大きな声出すなって。

「大丈夫みたいです。本当に」

麗が確認してくれた。

「僕らは学校から逃げ出す。一緒に来るか？」

孝が俺たちが学校から避難する事を告げた。

「え、ええ！」

まずい、ナイフに手が冴子止めるな俺はこのうるさい後輩の喉を
かつ切ってやるんだ。仏の顔も三度までだ。

結局、後輩の喉をかつ切る前に冴子に頭を殴られた。
いてゝ、これ絶対こぶになる。

俺たちは、正面玄関につき下駄箱の裏に＜奴ら＞から見えないよ
うに隠れている。

「やたらといやがる」

孝が下駄箱の裏からのぞいて確認した。

「見えてないから隠れる必要なんてないのに」

「じゃ高城が証明してくれよ」

「！」

そう絶対ではないのだ。もし、沙耶の説が間違いならば俺たちは
バリケードを築き立てこもるしかない。外には大勢の生徒であった
＜奴ら＞がはいかいしている。

立てこもっても食料がなくなり水、電気が止まれば餓死する。

「高城君の説が正しいとしても、この人数では静かに進むことはで
きない。校舎の中を進み続けたとしても………襲われた時に
身動きがとれない」

「玄関を突き抜けるしかないのね」

「誰かが……確かめるしかあるまい」

麗と冴子の言うとおりだ。正面玄関を抜けるのが一番でありそれには、誰かが奴らの中にいき確かめるしかない。

俺しか……いないよな。

「俺が行こう」

「「!?!」」

なんでそんなに驚くんだ。

「正先輩が行くより私が……」

「私が先に出たほうがいいな」

「いや、麗と冴子はいざとゆうときのために控えておいてくれ。もしもの時は俺が＜奴ら＞を可能な限り引き付ける。その隙に逃げろいいな」

「正先輩……なんで？」

「なんでって、俺が一番この中でもしもの際に動けるからだよ。まあ、そう心配すんな麗。それに、沙耶と冴子もだそんな目で見られたいけなくなんだろうが。そんなじゃいつてくる」

ゆつくりと俺は下駄箱の裏から＜奴ら＞の中に音をたてずに歩いていく。

なんかこの状況、昔もあった気がするな。確か、砂漠のど真ん中の地雷がめっちゃくちや埋めてあったところだった気がする。

俺の前を＜奴ら＞が通り過ぎる。

どうやら俺のことは見えていないようだ。それなら。

俺は近くに落ちていた運動靴を手に取り、冴子たちが隠れている反対側の方に投げた。

ガシャン。

運動靴は綺麗な弧を描き掃除用のロッカーに当たって音を出しながら落ちた。

＜奴ら＞は音に引き付けられ正面玄関から離れていく。

正面玄関の扉を静かに開けた。学校の扉は開けたり閉めたりすると、無駄に金属のすれる音がするんだよな。

ハンドサインを出してみんなを誘導する。ここまでは順調だな。

ガキイイイイン

音が学校中に響き渡る。

1人の男子生徒の持っていたさつまだが扉のステンレスの枠に当たり甲高い音を響かせたのだ。

くそっ！まずい！！

「走れ！」

孝がそう言い近づいてくる＜奴ら＞の頭を金属バットで叩き潰す。

「なんで大声だったのよ！！」

沙耶，お前も出てるぞ大声。

「黙っていれば，手近な奴だけ倒してやり過ごせたかもしれないのに！」

「あんなに音が響くんだもん無理よ！」

麗が＜奴ら＞を箒の柄の部分で足をはらった。
おお，なかなかやるな。

「いいから車まで走れ。冴子，援護任せた」

「承知！」

心強いね。おらおらどけどけ

俺は，正面玄関に置いてあった消火器を使い＜奴ら＞の頭を潰していく。ナイフだけじゃ正直つらいからだ。

ちなみに消火器は油，電気，普通火災に対応している『ABC』消火器である。家庭にお1つどうですか？

だいぶバスが近づいてきた。

「あと少しだ！」

「ぎゃあああああ！」

バットを持っていた男子生徒が首にかけていたタオルをつかまれ＜奴ら＞に食われた。

「卓造！」

「あきらめて！！噛まれたら逃げてても無駄……」

女子生徒が男子生徒のもとに向かおうとするのを、沙耶が止めようとするが女子生徒は沙耶の手をふりはらい男子生徒のもとへ向かった。

「待つ………なんでよ！　なんでよ！！」

沙耶はなぜ女子生徒が助からないとわかっている男子生徒のもとに行くのか理解できなかった。

「ちゃんと教えてあげたのに！！どうして戻るのよ！！信じられない！！」

「………」

麗は、なぜ女子生徒が男子生徒のもとに向かったのかなんとなく理解できたようだ。黙り込んでいる。

「私わかるわ」

静香先生が口を開いた。

「もし、世界中がこんなになってしまったのなら………死んでしまった方が楽なもの」

確かに死んでしまったほうがらくかもしれないが、それだけである。

死んでしまったら何のためにここまでやってきたのかわからない。

「あんたそれでも医者な・・・・・・・・」

「ふせろ!!」

「!？」

沙耶はとさっ伏せた。

消火器が沙耶の死角からせまる<奴ら>の頭を叩き潰す。

「沙耶，話なら後でいくらでもきいてやる。今は生き残る事に専念しろ」

俺は沙耶の頭に手をのせて言った。

「／／」

「仲良しで羨ましいことだ・・・・・・・・」

あの、冴子さん。 血だらけの木刀を俺に向けるのやめてくれませんか？

本当に怖いんですが。

やっとバスについた。

「急いで乗り込め静香先生、キィを！平野は車内から援護しろ」

「了解！！」

「いつまでも支えられんぞ！！」

冴子の言うとおりに、数が多すぎる！

「バスの前の＜奴ら＞を減らす。小室、冴子それまで持ちこたえろ！！」

「わかりました！」 「まかせろ！」

さて片付けますか。

遠心力を使い消火器で＜奴ら＞の頭をはねとばす。

「正！！全員乗った！」

「先にいけ！」

さっさとこんなところから退散しよう。

「・・・・・・・・くれえっ！！」

「！」

あれは、紫藤。

まだ生きていたのか。そんな事を思いながら俺は横に跳んだ。
ちっ！！

後ろに＜奴ら＞が迫っていたのだ。

くそ！

きりが無い。

消火器で殴る。

まずい、消火器がもたない。

消火器が＜奴ら＞を殴りすぎてガタがきていた。

なかなか体格がいい＜奴ら＞の1人を殴りついに壊れた。壊れた消火器を捨てて腰からコンバットナイフを取り出して横から手を伸ばしてきた＜奴ら＞の手首からはね飛ばし頭を貫く。

急いでナイフを頭から抜き取りバスに乗り込んでドアを閉める。

「静香先生！！」

「いきます！」

俺の合図と共にアクセルをふみこむ。バスが後輪をスピンしながら発車した。

車内には紫藤と他数名の生徒が乗り込んでいた。

バスが大きく揺れる。おそらく＜奴ら＞になった生徒をはねたのだろう。

麗が孝の腕に掴みかかった。

「後悔するわよ……絶対に助けた事を後悔するわよ！！」

孝は麗がなんのことを言っているのかわからないだろう。仕方がない。

この中で紫藤の本性を知っているのは俺と麗ぐらいだろう。

「校門をぬけます！！」

俺たちの学校からの脱出は途中犠牲を出しながらも成功した。

学校からの脱出（後書き）

いかがでしたか。

ご意見や感想がありましたらどうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1408v/>

学園黙示録～とある傭兵の物語

2011年10月29日13時10分発行